

発行日 2010.4.4

編集発行人 重富克彦

時は縮まっている。

1Cor7:21

Kairos

事務所所在地 064-0912 札幌市中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516

メッセンジャー

福音書のすべてに、世界で初めてのイースターの記事があります。ところが、それらをじっくり読み比べてみると墓を訪れた人数も、復活を告げ知らせた御使いの様子も、主が弟子たちに現れた場所もそれぞれに違っていません。特に、ルカによる福音書と他の福音書の違いは顕著です。ですから、主イエスの復活を否定する者たちの声がやむことはありません。

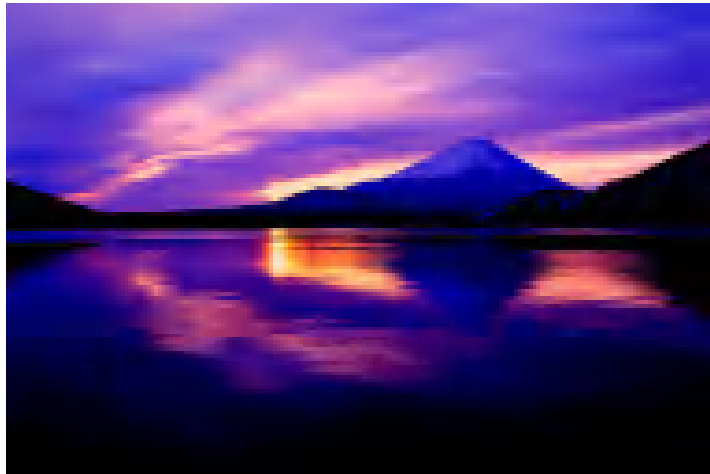
けれどもこのような違いがあるからこそ、私たちキリスト者にとってこの日は真実であり、喜びにあふれる感謝の日となります。なぜなら、幾通りのもの伝

承があるということは、確かにその基となった出来事が実際にあったからこそ、目撃者が1人ではなく複数であったと考えられるからです。しかも、すべての福音書が復活の朝の最初のメッセンジャーとなったのは女性たちであるとしています。

当時、「女たちの言うことは頼りにならない」ということで女性は法廷の証人に

もなることが出来ませんでした。しかし、マグダラのマリアともう1人のマリア、ヤコブの母マリア、サロメ、ヨハナ、一緒にいた他の女性たちの口を通して、「主は復活された」という喜びのメッセージが伝えられました。

見失われた者を見だし、死んでい



た者を蘇らせるために来てくださった方は、復活の日にも、小さくされていた者たちを通してご自身の復活を示されたのです。最初は取り合わなかったペトロや他の弟子たちも、熱心に語る女性たちに促され、空虚な墓の目撃者となります。そして、彼ら自身も復活の主の証し人となりました。それから疑り深かったトマスも、エマオへと逃れようとし

ていた弟子たちも、復活の主との出会いによって、信じる者へと変えられ、喜びを伝える者はどんどん増えてゆきます。こうして多くの人々の口を通して、イースターの出来事は伝えられてきました。

《最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上のもの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かはすでに眠りについたらにしろ、大部

分は今なお生き残っています。次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました（コリント15:3-8）と、使徒パウロも証ししているように、この喜びのバトンを渡された私たちも、証し人の一人として、今を生きることが望まれています。（K.Okada）

受洗おめでとう

4月3日(土)、札幌北礼拝堂での復活祭礼拝の中で、藤本真澄姉の洗礼式が行なわれる。藤本姉は、家庭のある40代の主婦。礼拝堂が新しくされて、教会が、あるグループに部屋を貸すようになったのがきっかけで、礼拝にも参加されるようになった。友人にクリスチャンがいたことも、礼拝に出てみようと思う動機の一つでもあったようだ。

藤本姉も、以前から「より高いお方の存在」を感じていた。教会に通う中で、それが、天地万物の創造主なる神であり、贖いの主キリストであることを知り、信仰告白へと導かれたわけである。

「何ごとのおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」と詠んだ西行法師の心情は、おそらく、日本人の宗教性として共通のものだと思われる。最近はその希薄になってしまっているかもしれないが、底流には、脈々と流れているはず。

ただ、その心情が、唯一の創造主への畏敬となり、救い主イエス・キリストへの信仰として開眼するのは、何と難しいことだろうか。

「聖霊によらなければだれも『イエスは主である』とは言えない」(コリント12:3)とパウロも言う。一人の人の信仰告白には、わたしたちが想像する以上の、神の熱い思いと、見えざる聖霊の持続的な働きがあるのだ。

一人の罪人が悔い改めに導かれて洗礼を授けられるとき、天には大きな喜びがあると主は言われる。わたしたちも嬉しい。天の喜びは地の喜びであり、地の喜びは天の喜び。これ



洗礼盤(札幌北礼拝堂)

が信仰の喜びの神秘だ。

洗礼は、死を超えて、復活の命へと向かう新しい出発点。未来はぼんやりとした未来ではない。イエス・キリストのおられる神の国が、未来のビジョンだ。そこへとイエス・キリストと共に向かう。共によい旅をしよう。

4.29 11:00 ~ 13:30 バザー第一弾 札幌礼拝堂

先人が始めた教会の隣人祭り

復活祭が終わると、札幌礼拝堂はバザーの準備で忙しくなる。今年も例年通り4月29日(木)11時~13時半。すでに特報第一号は出た。

去年は、各礼拝堂や、幼稚園の保護者の賛助出店もあり、天候にも恵まれ、盛り上がりを見せた。

今年も、食堂部、喫茶部、衣料・雑貨部、お花部、幼稚園父母の会(未定)、子供シアター、くじコーナーなど、5~6のコーナーが予定

されている。これらの店がフル回転するには、50人ほどの人員が必要だ。札幌北礼拝堂、新札幌礼拝堂からの参加も呼びかけている。

短期間の間に品物も揃えなければならぬ。積極的な献品をお願いしたい。ただし、衣類は洗濯済みのもの。背広、電気製品は除くとのこと。

世話人は森川利一兄。栗原朋友子姉。

めばえ幼稚園

4月8日(木)になると、春休みを終え、一段と成長した姿で、子どもたちが登園してくる。いちご組だった子どもたちもちゅうりっぷ組だ。

4月12日(月)。新しいちご組の入園だ。家庭を離れてのはじめての社会。みんな不安で一杯。でも、めばえひろばでなじみの子どもたちにとって

は、勝手知ったる幼稚園の庭だ。

子どもは愛の天才だ。人と仲良くするのが一番の自然体である。それを意識することもなく、難なく身に着けている。不安で一杯で入園し、お母さんから離れることをぐずっていた子ども、かならずみんなの仲間に入ってしまう。何にも心配いらぬ。

今年は昨年より10名以上園児数が多い。年長さん19名、年中さん19名、年少さん18名。まだ少し増える



可能性もある。

グラウンド一面の雪も、急速に溶けだして、子どもたちを迎える準備をしている。

死の予感

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

詩編23:1

このシリーズも、最大限あと12回をのこすのみだ。自分の死をどのように受容するか、残りはそこに絞って、書くと思う。受容しようがするまいが人は死ぬときは死ぬ。だから、このような思索は無駄なのかもしれない。けれど、わたしたちの立場は、死は終末ではなく中継点で

あるという立場だ。ターミナルケアという言葉は、一般に終末期医療の意味で使われる。けれど、バスも、列車も、飛行機も、ターミナルは、終着点であると同時に始発点でもある。死の準備というのは、次の世でのより高い質の命にあずかるための準備でもある。

「ねがわくは花の下にて春死なん。そのきさらぎの望月のころ」という平安末期に生きた西行法師の歌は、わたしたち日本人の、理想的な死の受容の仕方をうたったものとも言える。

きさらぎと言えば旧暦の2月。太陽暦だと3月になる。望月の15日は桜には少し早いとも思うが、その頃の桜と言えば山桜だから、やはり花は桜を意味したのだろう。むろん北海道はまだ雪も溶けない冬。

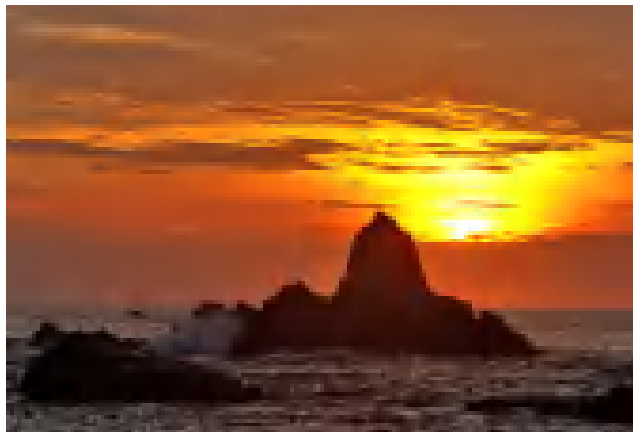
この歌を詠んだのが60代の中頃のことで、実際に死んだのは73歳。詠んでから死ぬまでには少し間があったが、彼は歌に詠んだとおり、旧暦の2月の16日に死んだといわれる。釈迦入滅日の翌日である。

この日に彼が死んだのは、偶然ではない。一年ほど前に死期を悟ってから、寺の裏山に庵を結び、いよいよ死が近いと感じ始めると、穀物を断つ木食(もくじき)に入り、塩断ちをし、最後に断食をして、静かに死を迎えたと言われる。

昔の修行者たちは、自分の死をこのようにも正確に予感し、死に向かって自分をコントロール出来たのだろうか。むろんだれにでも出来ることではなかつただろう。

新札幌礼拝堂での聖書の学びのとき、「殺してはならない」という十戒の教えをめぐる、けっこう深い意見の交換が出来た。話がターミナルケアの話題にまで深まったとき、この西行

の話をしたのだが、そこで、ネパールでは、修行僧でもない一般の人が、同じような死の迎え方をすることを、s 当地で医療活動をしている檜戸氏の夫人から聞いた。彼らは、死期を悟ると退院して自宅に帰り、やはり、食を断つなどをして、自分の死を静かに迎え入れるのだという。同じような習慣が、インドにもあり、インドには「死を待つ人の家」があることは、マザーテレサの活動などでも知られている。



ネパールにしてもインドにしても、途中で延命を断念して、死の準備をするのは、貧しさによるものともされるが、案外自分の寿命を受け入れるごく自然な態度でもあるように思える。

ただこのような覚悟をもっての死の受容と現代の高度な医療は、かならずしもなじまない。現代医学からすると、それは緩慢な自殺とも見られ得る。「死を待つ人の家」にいる人たちも、高度な延命治療を施せば、あるいは半年一年と命を永らえるかもしれないのだ。

とはいえ、ホスピスはもとより、がん

センターなどでも緩和治療の重要性が認められてきており、その体制も整ってきている。これは、古来からの自然な死の受容のあり方が新しく見直されてきているものとも言える。

ともあれ、高度な医療体制のもとにいる現代人にも、西行のように、早い時期から、正確に、ではなくても、死期を悟ることはあるようだ。死ぬ前に、部屋を整えたり、身辺整理をしたりして、突然死を迎える例もある。また多

くの人は、自分の死が近いことを、それとなく周囲の人に告げたり、別れの言葉を告げたりする。私の父も、死の一週間ほど前だったか、見舞いに行ったとき私の顔を見るや、「からだから力が抜けてしまった」と、絞り出すような声で言った。間近に迫っている死を予感していたのだと思う。妻は、やはり一週間ほど前「頭がおかしくなる前に、有り難うと言っとくね」と、私に向

かって言った。ある程度の余命は本人も知っていたが、その時、いよいよ死が近づいたのを予感したのだと思う。死が予感できるのなら、その時点が、点滴による栄養補充や、あらゆる延命措置を断つときなのであろうか。

西行は、花びらと共に土に散るイメージの中で自分の死を受け入れた。わたしたちキリスト教徒にとっては死は、神のみ腕に抱かれることであり、復活の新しい命を与えられることだ。人格の一貫性は消滅しない。土に帰るのは肉の体のみである。

(重富)

<イースターの卵>

日本の教会でも復活祭のお祝いに彩色卵を教会学校や幼稚園の子どもたちに贈る習慣が一般化しているようだ。「復活祭」を意味する「イースター」は大概の国語辞典に外来語として語彙登録されている。英語名Easterは、標準的な語源辞典によれば、春と曙のゲルマンの女神エオストラEostraeを祝う異教の春祭りに由来する語であるとされている。Easterはドイツ語のOsternに対応する。筆者が学生時代から愛用している佐藤通次著『独和言林』によれば、Osternは「ゲルマン神話の春の女神オスタラOstaraに捧げられた春祭り、キリスト教が入ってから転化した」と語源を説明したあと「(キリスト)復活祭(3月21日以後の最初の満月後の第1日曜日)」と語義を記している。この個性ある独和辞典の語源説の典拠は『グリム童話集』の編者として有名な言語学者ヤコブ・

グリムの提唱した学説である。文献上Easterの起源を女神エオストラEostraeに求めた最初の人、8世紀のアングロ・サクソンのベネディクト会修道士で教会史家のベダ・ヴェネラピスBeda Venerabilis(673 - 735)である。このゲルマンの女神の存在とその祭儀については実証されていないが、グリムはベダの情報に基づいて比較言語学・比較神話学の立場からオスタラOstaraなる女神の名称を理論的に再構築した。したがって、「イースターEaster」の語源説は当初から仮説にすぎないが、民衆

は、学者の説とは関係なく、さまざまな興味深い伝説を創り出す。野兎は春の女神オスタラのために春を先導する聖なる動物で、春祭りの朝が明ける前に野原や木の下に卵を隠す(あるいは産む)という。「イースターの兎Easter bunny」がもたらした「イースターの卵Easter eggs」を探す



ヨーロッパの民衆文化とキリスト キリスト教の中の民間信仰 (8) 栗原成郎

アメリカの子供の遊びは、アングロ・サクソンの民間伝承に起源をもつ。一方、復活祭の卵を美しく彩色し、精巧な絵柄で装飾する技術で最も優れているのは、ポーランド、ウクライナ、ロシア、チェコ、スロヴァキアなどのスラヴ圏の民衆芸術である。玉ねぎの皮(黄褐色)、ビートの汁(ピンク)、マリゴールドの花(金色)、ライムギの新芽(緑色)などの天然の染料を用いてゆで卵(あるいはストローで中身を吸い取った生卵)の殻を着色する。彩色卵は教会で祝別されて復活祭の儀礼食となり、また友人間でプレゼント

交換に用いられる。

本来、卵とキリスト教とは直接の関係はない。外観は冷たく、命のないものに見える殻の中に新しい生命を宿している卵を死からの再生の象徴と見るのは、広く古代人に見られる異教的な生命観である。古代スラヴ人の表象によれば、卵はすべての根源の根源であった。聖書外典(アポクリファ)の伝説によれば、宇宙は巨大な卵としてイメージされた。宇宙卵の殻は天、薄膜は雲、白身は水、黄身は大地である。また、死体のように冷たい殻の内側に目に見えない生命を秘めている卵は、死の克服、新生のシンボルと考えられ、異教的死者崇拜と結びついて呪術的手段に用いられた。それゆえにカトリック教会は、

そのような異教的世界観と一線を画するため復活祭のあいだは卵を消費することを12世紀まで禁じていた。しかしその後、この禁止は彩色卵を教会で聖別することによって解除された。またその一方

において、民衆は彩色卵の由来をキリスト教的に浄化する物語を創作した。ポーランドにこんな伝説がある。キリストの空虚な墓のそばで悲嘆に暮れていたマグダラのマリアに天使がキリストの復活を告げ、また復活の主が御自身を現わされたとき、マリアは嬉しさのあまり家へ飛ぶように帰った。見ると、家に保存していた卵がみな美しい赤い色に染まっていた。マリアはイエスの弟子たちにそれらの卵を分け与えて、主の復活を証言した。卵は使徒たちの手の中で小鳥になり、空高く飛び立った。

日本福音ルーテル札幌教会 牧師 重富克彦 岡田 薫

札幌教会 URL <http://www.jelc.or.jp/sapporo>

札幌礼拝堂 064-0912 中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516

札幌北礼拝堂 001-0031 北区北31条西4丁目1-5 011-726-3243

新札幌礼拝堂 004-0053 厚別区厚別中央3条6-1-5 011-891-5246

